太公望と呑舟の魚

40 期 松木義昭

紀元前 11 世紀頃、その当時諸侯の一人にすぎなかった西伯（後の文王）が渭水という川辺で釣りをしている老人に出会いましたが、よく見ると釣針に餌がありません。餌がついていなくて魚が釣れるはずがありませんので、「何をしているのか」と声をかけたところ、老人は「もしかしたら天下が釣れるかも知れん」との答えでした。これにピンときた西伯はこの人こそ我が太公（西伯の祖父）が望んでいた人物であると評し、その場で軍師として召し抱えました。この老人呂尚は、西伯（文王）を助け周を建国し、のちには斎の王になりました。今日、魚釣りを太公望と呼ぶのはこの故事に基づいています。

我が日本では、東京大学を卒業して鉄道省に入った若き佐藤栄作氏。大正 12 年頃、福岡県二日市駅長をしていましたが、休日になると私の故郷、佐賀県神埼市神埼町の大町橋付近の堀 でフナ釣りをしていたと後年、政治家になり神埼町で行った演説で話をしたそうです。今でも休日ともなれば大町橋付近の堀には太公望の姿を見ることができますが、若き佐藤太公望は後年、総理大臣という「呑舟の魚」を釣り上げたのはご承知の通りです。佐藤氏の政治家としての功績はたくさんありますが、最大のものは戦後の懸案だった沖縄の本土復帰を実現したことです。また、総理大臣としての在任期間は 7 年 8 カ月にも及び、非核三原則を提唱し、世界平和に貢献したとして 1974 年にノーベル平和賞を受賞されたことは同じ日本人として誇りに思います。